

第1回彦根市文化観光推進協議会
会議録

第1回彦根市文化観光推進協議会

第1 開催日時 令和3年2月4日(木) 午前9時30分から午前11時10分まで

第2 開催場所 彦根城博物館 講堂

第3 出席者 出席委員

滋賀大学 社会連携センター 特任准教授	上田 雄三郎
滋賀県立大学 地域共生センター 講師	上田 洋平
彦根観光協会 専務理事	矢田 全利
近江ツーリズムボード マネージャー	小島 聖巳
ひこね文化デザインフォーラム 理事長	戸所 岩雄
彦根商工会議所 副会頭	上田 健一郎
彦根城運営管理センター 所長	宮川 敏明
彦根市産業部長	中村 武浩
彦根市歴史まちづくり部長	広瀬 清隆
彦根市都市建設部長	藤原 弘
彦根市教育委員会教育部長	岸田 道幸

◇事務局(市関係所属)

歴史まちづくり部副参事(文化財課長)	松宮 智之
歴史まちづくり部次長(景観まちなみ課長)	久保 達彦
歴史まちづくり部都市計画課課長補佐	古市 卓志
都市建設部交通対策課長	宮永 幹雄
彦根城博物館副館長(管理課長)	山本 明彦
彦根城博物館学芸史料課長	渡辺 恒一
産業部観光企画課長	北村 慎弥
産業部観光企画課課長補佐	大西 嘉雄
産業部観光企画課観光企画係長	藤原 康博

第4 議題

- 1 会長・副会長選出
- 2 文化観光推進法に基づく地域計画の策定について
 - (1) 文化観光推進法の概要について
 - (2) スケジュールについて
 - (3) 観光振興計画について
 - (4) 文化観光推進法に基づく地域計画について

第5 会議資料

- 資料1 彦根市文化観光推進協議会設置要綱・委員名簿・会議公開要領
- 資料2 文化観光推進法の概要
- 資料3 彦根市観光振興計画(平成28年策定)
- 資料4 彦根市観光振興計画進捗状況
- 資料5 (仮称)彦根城・彦根城博物館を拠点とした文化観光推進地域計画(素案)

会議録

1 会長・副会長選出

会長については、彦根市文化観光推進協議会設置要綱第3条第2項の規定により、協議会の会長は委員の互選により、副会長は会長の指名によるものとしている。会長の選出について意見を求めたところ、委員より「事務局一任」との声があり、事務局案として、滋賀大学 上田雄三郎委員を会長にお願いしたい旨を諮ったところ、異議なしとの声であったため、上田雄三郎委員に会長をお願いすることとなった。

また、会長から、産業部長 中村委員が副会長として指名された。

2 文化観光推進法に基づく地域計画の策定について

(1) 法の概要について

(2) スケジュールについて

◆資料2に基づき事務局から説明

○委員

ここでいう文化とは、いわゆる文化財や文化遺産など文化の中の狭義的な意味合いでの文化財、文化遺産というものを指して文化という表現ということによいか。

○事務局

ここでいう文化とは、彦根城、彦根城博物館における文化をどのように生かすか、ということであるので、いわゆる狭義的というご理解でよいかと思う。

(3) 観光振興計画について

◆資料3・資料4に基づき事務局から説明

○委員

指標に関して、人数をたくさん集めるということと、安心安全ということに関して、この1年間で相当イベント等やその評価に対する考え方というのをガラッと変えていかないという部分がたくさんあると思うので、満足度や安心安全など、人数とかだけではなく、質的なところの指標・目標について、この時代にここ彦根から示せるようなものを議論できたらいいと思う。また、そのようなことがますます重要になってきていると思う。

今回、BIWAKOビエンナーレがコロナ禍でも行われたが、BIWAKOビエンナーレでは、中の施設だけ、彦根城だけでなく、少しオープンな形で街のなかの資源とも繋がりながら実施された。そのように、単館でなくネットワークで考えるという考え方もあるのかなと思う。

それから、アクセス数などICTをつかった場合にどう的確にとらえるか。滋賀大学ではビッグデータを取り扱われているところもあるので、そういうところも勘定に入れたり、それを生かしていくことも必要ではと思う。

○事務局

コロナの関係で大型イベントは軒並み中止になった。課題としてコンスタントに誘客を図りたいという思いがあり、今回こういった文化観光にも取り組んでいく。

ただ、経済波及効果を上げていくためには、一定の誘客も図らないといけないということも、この計画前半の5年間で見えてきている。

コロナの収束が見えない中で、事務局としてもどういったバランスでやっていくのかというのは手探りでやっているところであるので、ご意見もいただきながら進めていきたいと思っている。

○委員

彦根城の状況としては、昨年10月からGOTO効果が出てきたが、伸びた11月でも昨年比80%を少し超えたくらい。12月は、第三波で急に落ちて本当に悲惨な状況。

この先どのような流れになるか読めないが、こういう機会なので、おもてなしや満足度の向上のため、まずはスタッフの意識改革や風通しのよさなど準備万端にして、コロナ明けに上向きになるよう準備をしている状況。

○事務局

今の観光の状況の参考として、昨年末に横浜で行われた『お城EXPO2020』というイベントにPRのため参加したところ、お城好きの方などたくさんの来場者があり熱量も高かった。

最近ではテレビでもよくお城は取り上げられるし、チャンスはあると思っている。今は来れなくても熱い思いを持っている方がいるというのは感じているところなので、なんとか取り込んでいきたいという思いはもっている。

○委員

「彦根ならではの満足度」とはどういうものか、彦根における満足のバロメータのようなものをここで議論してみれば、彦根の魅力を向上させることに寄与するのではないかと思う。

また、計画を進めていく中の一つの視点、ヒントになると思うので、委員の方々の意見が聞けるといいと思う。

○会長

この話は、最初の質問の「文化を狭義に捉えるか、広義に捉えるか」という話に非常に似ている部分が出てくるのかなと思う。

○委員

参考までに観光満足度調査は、日本人、外国人それぞれに対し近江ツーリズムボードで実施している。

外国人に対するものは、宿泊施設の満足度、また、飲食店における接客、サービスの態度はどうだったかということや、彦根城の満足度がどうだったか、キャッスルロードはどうだったかなど、サービスや施設の満足度をとっている。

また、近江ツーリズムボードでは、現在、文化庁の文化財多言語整備支援事業というのをやっているが、外国人目線で見たとときに、解説文が直訳になっていると、いきなり井伊直弼が出てきて、まず「誰？」っていうことから始まり、わかりにくいということがある。

外国人目線で、歴史にピックアップするというよりも、なんで石段の幅が違うのかなど、城の構造が彦根城はわかりやすくおもしろいところがあるので、そういったことがわかるアプリを開発しているところ。

博物館も、せっかく木造棟とかいいものなのに、解説文があるだけで、もったいないところがあるので、そういったところを改善することで施設の魅力を上げたり、機材を使うことでサ

ービス・おもてなしの向上ができればいいのではと思っており、そういったところを重点的に支援できればと考えている。

○委員

満足度でいうと、「食」の分野の比重が高く、特に食文化、彦根地域ならではの食、湖東地域の食というものを提供することが満足度の向上に繋がるのではと考えている。

そのほか、体験、「コト消費」の満足度。

あとはやはり、「人と人とのふれあい」。ちょっと訪れた施設、飲食店でのコミュニケーション、そのとき感じる接待する方の雰囲気、動作、お声掛けとかそういうところで満足度が高くなるのかと思う。

これらを3本柱と考えているので、こういったところを高めていったらよいのかと思う。

○委員

指標として、「彦根ならではの満足度」というのもあるが、そういう意味で、計画も「21世紀型」であれば、評価の仕方、あり方も「21世紀型」ということを考えていく観点が必要。例えば、指標でももっと市民と共有しながら、うまく結び付けていく。

例えば、SDGsなどは、目標を非常にわかりやすい形で共有できる一つのテクニックかなと思う。ああいう形で目標を市民に身近に感じていただいて、観光消費額何円とかでなくて、もう少し形、いい方を分かりやすく変えて示しながら市民と共有して、一緒に達成しましょうよ、という形とか、評価に関しても、参加しながら目標達成に向けてというようなことも大事かと思う。

満足度に関しても、熊野古道の方に聞いたところでは、外国人でも欧米の方とオーストラリアの方では全然ニーズが違うということなので、満足度を調べるにしても、これからはそういう細かなところまでいかないと捉えきれないところもあるんじゃないかと思う。

欧米の方は、歴史をじっくり聞きたがるが、別の地域の方は、とにかく歩きたい、トレッキングをしたい、という方もいらっしゃる。

外国人にもいろいろいると思うので、より深く、幅広く考えていく必要があるのかなと思う。

彦根は、11万人のうち、6千人かもうちょっと多く学生がいる学生のまちと言ってもいいんじゃないかと思っており、学生たちが関われるようなものにしていければ、と思う。

そういう意味で、計画を知っている人の割合とか、それにかかわろうとしている人の数とか、学んだ人の数とか、ここには載ってないかもしれないが、見ていけたらいいのかなと思う。

○委員

満足度を考える中では、不満足度を与えない、ということも大事。

よく外国人の方は、Wi-Fi環境のことを言われる。宿泊施設でも環境が悪いとすぐ怒られる。彦根城博物館・彦根城は、Wi-Fiの環境があまり良くないということで、おしかりを受けることもあるので、満足度を考える上では、不満足度を解消するというのも一つかなと思う。

○委員

市民のための、というのは大事だなと思っており、一時期、よく京都でオーバーツーリズムの問題が取り上げられていたが、観光消費額を上げるのも大事だが、まず住民にとっても住みよいまちづくりというのは大事だと思うので、市民満足度の調査もゆくゆくはできたらと思っている。

「広報ひこね」なども活用させてもらって、何かしらでアプローチして満足度調査を行うとともに、なかなか市民は彦根に対して興味をもってもらえることが少ないので、見せるところ、発信するところと、それを踏まえて調査するところの連携ができればよいと思った。

○委員

今回の会議のベースには、拠点を活用した観光という意味合いがあるが、そのクラスターという形で彦根城・彦根城博物館を核とするけれども、その魅力を成熟・熟成させるためには、周辺のいわゆる文化環境、文化財の活用であったり、民間であったり、食の問題であったり、会議のテーマは軸にありながら、その周辺のことについて、少し価値を加えるという意味での議論が付加されると、より実りのあるものになるのかなと思う。

○会長

皆様のお話を聞いていると、目標値が色々あってそれらも一つの指標かと思うが、コロナ後の環境も含めた、「彦根ならではの満足度」の指標をある程度考えるべきではないかというのが一つのご意見。

その中身はこれからいろいろ今アイデアがあったので、検討する中で、次の2025年にはそういった指標があったらひとついいのかなというのが皆さんの意見かなと思う。

ただ非常に難しいのは彦根ならではの「ならではの」というのはマーケティング的には差別化になるので大変いいかと思うが、何があるのか、いろんな観点があるので、何をもって満足度とするかという指標の問題になる。

また、データを今まで取っていたが、色々な事情でやめたというような話もあったが、やはりデータというのはずっと時系列でとってそれを分析することが、観光なり色々なものを良くする部分になるので、そういうことも含めて指標というのは非常に大事である。

客観的指標が一番いいような気がする。そういうような意見が多いのかなと思う。

この件はまた何か今日ここで言い足りない方もあると思うので、後ほど意見があれば事務局までお寄せいただければと思う。

(4) 文化観光推進法に基づく地域計画について

◆資料5に基づき事務局から説明

○事務局

補足として、計画(素案)に記載の事業については、令和3年からとなっているものもあるが、具体的に予算措置をしているものではない。あくまで原課レベルでこういった事業をやって文化観光を進めていきたいという計画段階であるので、具体的な予算措置については、計画の認定後に編成という形になるので、この時点で確約されているわけではない。

既に実施している事業もあるで、そういったものは実施していくが、計画(素案)に記載しているから必ず実施できるというものではないので、ご了解いただきたい。

○委員

彦根城ということになると、小学生・中学生に関する事業というものはあるが、大学生という言葉が出てこない。

かかわるところはあるのだが、具体的にこういう事業というのはなかなか出てこないで、我々の方でももっともっとかかわっていかないといけないな、と思う。

彦根でも、聖泉大学、滋賀大学、滋賀県立大学で、また、市も入った協議会を作り、「彦根湖東学」というものを3大学連携で行っている。

また、滋賀県立大学と滋賀大学で、商工会議所からの支援を得て、世界遺産のまちづくり・人づくりというものもやっている。

こういう実績を踏まえて、計画に入れろということでもないが、そういう観点で何か参考にできることを我々も考えていかないといけないなと思っている。

今、授業の様子をビデオにとって、市民の方々に見えるコンテンツにしていこう、教材・テキストづくりをしていこうということもしている。そういう点でも何かこれから、小中高大連携、地域探究的な学習というのが指導要領が変わって入ってくる中で、そういうことと連携できるといいのではと思う。

○委員

一昨年だったと思うが、世界遺産の講座を彦根東高校で、彦根商工会議所が提供して実施したところ、とても興味を示してもらえたという経過がある。

小中学生の子どもたちへの歴史文化普及事業のところ、なんらかの形で高校もできるようにしてもらえたら。また、大学の方も連携して発信するといいいかなと思う。

もう一点、おもてなしというかサービスという意味では、観光人材の育成をしていかないと、なかなか受け入れたときの満足度も低くなってしまうので、例えばボランティアガイドの育成をしていくとか、プロのガイドはこちらにはいないので、そういった一流のガイド、これで生計を立てることができるよう人材を育成する土壌を作っていってみたいと思う。

○委員

外国人の増加を見込むという点で、10ページの彦根城博物館能舞台・木造棟を活用するというのはいいと思ったのと、先ほどの彦根らしさの差別化に繋がるのではと思った。

今後、コロナが終わると、さらにFIT(海外個人旅行)が増えると思うので、こういった体験などを色々としていければいいなと思っている。

11ページの文化資源の魅力発信事業の方で、QRコード等の整備とあるが、今ちょうどアプリを作っていて、スポットごとに動画や解説文を作っているの、そういったところと連携できればと思っている。

一方で、外国人目線になると、QRコードとなるとWi-Fiがないと厳しくなるので、彦根城の方もWi-Fiの整備が必須になるかなと思う。5Gの世界にもなるかなと思うが。

15ページの方の商品グッズ等の開発事業に関しては、日本人と外国人で作るものが違ってくと思う。

外国人目線でいうと、近江観光大使のクリスグレン氏によれば、「ひこにゃん」とかそういったキャラクターよりかはもっと彦根城の魅力を見せてほしい、天守の前に「ひこにゃん」の看板が立っているのも、せつかく昔の歴史が感じられる場所なのに、今のものがあるということに違和感がある、という意見もあるので、日本人目線だと「ひこにゃん」で売り出していきたいというところはあるが、そういった意見なども重視してグッズなども開発していければと思う。

16ページのインバウンド推進事業の宣伝も、同じくクリスグレン氏のフェイスブックなどは7万人ものアクセスがあって、歴史・城好きな海外の方が見ていらっしゃるので、そういうところとも、うまく連携していければと思う。

そのほかの助言としては、城内のポールなども緑色のプラスチックのものは違和感があるので、最近、竹で覆ってくださったりしているのもあると思うので、そのようなハード整備にも注力していったり、ベンチをつくって休憩スポットにしてゆっくり滞在してもらったりなど、観光客目線で整備していけたらいいのかなと思った。

有料ガイドの話もあったが、海外では1万円で学芸員がつくような仕組みがあるので、そういったところの育成ができればいいのかなと思う。

通訳案内士による英会話セミナーも飲食ホテル向けにしているの、連携していければと思う。

○委員

「彦根ならでは」というところに関連するが、木造棟の活用云々の中で、「体験をする」という言葉しか書かれてないが、外国人の方を含めて、歴史講座であるとか、少しコア文化、デ

ィープな文化に対する関心が大変高く、これからも高くなっていくだろうということがある。

いわゆる知的好奇心をいかに満足させるか。先ほどの満足度に繋がるが、彦根城の魅力を単に一つの言葉で表すのではなくて、「どこの」「何が」「どれが」というように、わりと固有名詞的な形での学習をする機会、そういうものも結果としてより多くの集客に繋がっていくのかなど。彦根の魅力を発揮するには、単に一過性の体験型というだけではなくて、もう少しディープな学習をする機会をアピールすることも必要だと思う。

○委員

場内の駐車場に関して、コロナになるまでは、土日明けなどは、匿名ながら市民からの苦情も多く、土日に出勤していると、場内のいろいろなトラブルで事務所に詰めてられなかったときく。

おもてなしに繋がるのか、満足度に繋がるのかわからないが、やはり市民が笑顔で観光客を迎えられることが満足度の基本であると思う。

いいことはもちろんやっていかないが、悪いことを摘んでいくことも、リピーターを増やすための基本的なことであると思う。

迎える側の気持ち、市民の笑顔であったり、観光客に声を掛けられる環境づくりも大事だと思う。

○委員

文化があって、暮らしがあって、経済があって、それをつなぐ何かがあるというのが観光かなと思うので、観光と経済と暮らしがトレードオフになってしまわないような形というのは常に考えながら議論していきたいと改めて思った。

彦根城をテキストや教材として、小中学校へ教える場合でも、彦根城ということで外国人の方を迎えるのであれば、標識、サインとかそういうこと以前に、顕著な普遍的価値とか国際社会共通の価値観というものを、彦根城を通して共有する。

彦根城をどうアピールするかばかりではなくて、彦根城を国際化する中で、市民、小中学生にもしっかりと伝えていくという観点が必要だと思う。

このことは、この計画で落とし込んでいって実施されるときに、そういう観点がなく、共通の価値観から外れてしまうと、来るとか来ないとか以前に見識を疑われてしまう。そのことは即座に広まっていく。

文化、暮らし、経済、このかかわりの中でこの計画があって、というバランスを見ながらトータルに考えていく中での計画であったり、事業であってほしいと思う。

○委員

10月から来て、3か月と少しになるが、彦根ですごいと思ったことは、「ひこにゃん」があるが故に、NHKを始めいろんな取材がくる。マスコミ効果は非常に大きい。なかなかふつうは来ない。これがここに来ると逆に向こうの方からお願いします、と来られる。これは彦根の強みだと思う。この会議に来て、いろんな意見があってなるほどと思うが、ベクトルは同じ。満足度のアップのためである。

いずれにしても彦根は大きな強みを持っているので、発信力は他のエリアに負けないと思う。

○委員

どうしてもこういう会議では、「文化についての理解を深める」など、どちらかといえば啓蒙的な言葉が表に出てくるが、基本は「文化を楽しむ」という視点がやっぱり必要なのかなど。

決してそのことにより文化度が落ちるとか云々ではなく、よりディープな文化を楽しむというようなこともあるので、何か表現の中に「文化を楽しむ」という視点がうたわれるとよいのかなと思う。

○会長

確かに文化を楽しむことで満足度が上がるというか言ってみれば気持ちよくなるということなのかなと思う。

彦根市のフィロソフィーというか、考え方の中に、環境とかそういうものを入れた方がいいのでは。

いろんな事業の中で、再生材を利用するとかごみに対してどうするとか、そういったことを含めて、地域、住民も、環境も守りながら、一つの文化振興をしていく、楽しい文化振興をしていく、それが彦根らしさに繋がる、彦根からそういったことを発信していく。

そういったものをより強く打ち出される方が差別化にもつながるのかなと思うので、そんな観点もいれていただけたほうがと思う。

○委員

そういったことでは、彦根城そのものにエコマークがついてるとか、フェアトレードが城についてるといような勢いで考えていく。

SDGsもそうかもしれないが、そういうものが必要。環境とか自然に関しても、モノだけでなくコトということであれば一体であると思う。

デービッドアトキンソンさんが彦根で講演されたときに、外国人が一番目指してくるのはやっぱり自然だと。朝に寺、昼に寺、夜に寺では日本人でもわけがわからない。そんなところに一週間滞在するのは考えられない。

けれど、ビーチなら、一週間美しいビーチに滞在する、雨降ったら寺を見に行く、そういう滞在はあり得るだろうとおっしゃっていた。

彦根の強みとしては、これまでの中でも、城だけではなく、それを含む城下町、その周りにある自然。ビワマスが秋に上がるような川がすぐそこにある、というのは都会では信じられないこと。そういうこともやるべきではないかと。

楽しむという点で、体験だけでなく、生活というのものもある。もっともっと町に住まう。たとえば今、県立大学の教員の中でも芹町の中、足軽屋敷に住もうとしている者もいるし、学生出身で住んでいる者もいる。留学生もたくさんいる。

そういう人たちがそこに住まうことを通じて、生かしながら、活用しながら、発信しながら、そして、おもてなしもできるという。

ボランティアガイドの育成、プロの人材育成だけじゃなくて、その文化を生かすプロの市民というか。しかも若い留学生とか、これは非常に活用できると思う。

まだまだそういう意味で発掘されてない、繋がっていないところがあると思うので、この事業や計画でその繋がりを作る、ということをやっていけばと思う。

観光で、食べ物が食事になっていないなというのがいつもの感想。「いいものあります」と、テーブルの上に乗せられるが、素材はいっぱいあるけどどう食べていいのかわからない。

物をどう食事にするのかという中で、素材は豊富だけど、調理するシェフはいるのか、ホールスタッフはどうなのか、食べる場所、しつらはどうなのか、「モノ」と「コト」と「トキ」、そのデザインを統一的、総合的に考える必要があるかなと。

まだまだ活用できるものもたくさん溢れていると思うので、繋がりを作るという観点で臨んでいきたい。

○会長

今回、委員の方からいろんなご意見があり、それらが計画をつくるヒントになったり、気づきになったりいろんな視点になろうと思う。

○事務局

お話をいただいたことを踏まえ、事務局で整理をした上でもう一度お示ししたいと考えている。

○会長

意見を整理いただいて次回計画案として示していただきたい。

○事務局

本日いただいたご意見のほか、別途メールにて意見照会をさせていただく。

なお、文化庁とも事前相談をしながら進めていくので、その中で変わってくる部分もあると思うが、それも含めて次の会議の際に報告できればと思う。

※次回の会議までに、各委員へ意見を照会し、事務局にてとりまとめることとなった。